

## 原三溪の美術 伝説の大コレクション

横浜美術館 2019.07.13～09.01

「原三溪」（本名富太郎）（1868～1939）は、明治から昭和前期にかけて横浜において生糸貿易や製糸業などで財をなした実業家で、昭和初期には近代日本の近代発展期に経済界を牽引し、一方、独自の歴史観に基づき美術品の収集家として知られている。

本展は、三溪旧蔵の古美術や近代美術である「絵画・工芸・彫刻」など「約100点」に、三溪自筆の書画・資料により美術に対する彼の眼差しに焦点を当てている。

展覧会の構成は、「原三溪」の文化人としての全体像を描き出すという企画である。

1. 恐るべきコレクション その神髄を過去最大規模で紹介。2. 国指定文化財（国宝・重要文化財25件以上を含む）珠玉の美術品が結集。3. コレクター 茶人。4. アーティスト パトロン の4つの業績に焦点を当てている。

国宝《孔雀明王像》 12世紀（平安時代後期） 絹本着色・一幅



画面いっぱいに図絵された堂々たる尊容や、正面をしっかりと見据えた明王と孔雀との鋭い眼差しには威厳が満ちている。正面を向き一杯に翼を広げた孔雀の背に座る「孔雀明王像」は天変地異、疾病などの種々の災害から免れるために信仰された像で、肉身は白色、輪郭を細い朱色でくくり、着衣は彩色の文様に加えて繊細な切金模様を施し、孔雀の羽にも同じく切金模様が見られる。朱、丹、緑青、群青などの色彩を使いながら、白のぼかしや中間色を巧みに用いて全体を優美に仕上げている名作品である。

重要文化財《伝毛益 蜀葵遊猫図（しょっきゅうびょうず）》12世紀 絹本着色・一幅



南宋画の代表作品で、美しい立葵のもとに、一匹の親猫と戯れる二匹の仔猫に蝶を見上げる仔猫が、克明な描写ながらも愛らしさがある様子で描かれている作品である。

仔犬に付けられた赤いリボンが宮廷の飼犬であることを示唆するため庭園の愛玩用の様子を描いた作品とされ、“猫と蝶には長生の意味”があり、“萱草（かんぞう）には男子誕生の吉祥画となるため”とされている。